
災厄に殺されし者～その者幻想に落ちる～

アキラ・M・白堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

災厄に殺されし者々その者幻想に落ちる

【Nコード】

N4099Q

【作者名】

アキラ・M・白堂

【あらすじ】

この世界に不満を持つ人達。高音たかね 光輝こうきもその一人だ。久しぶりに取れたまとまった休みに光輝は静かに山でキャンプをしようとするが。

「…さすがにこれは予想外だろ」
後に災厄と呼ばれる何かに殺されてしまう。

そして予想外の死を遂げた光輝は管理神により能力を受け取り転生、いつまた相まみえるのかわからない災厄を滅することを誓い世界を回るのだった。

作者の気まぐれによりクロスする可能性激増の激アツです。
ほかの作品は自信がつくまで放置します。ごめんなさい。

プロローグ 変わらぬ日々（前書き）

この小説は駄文、自己満足。設定が甘い等の要素が過分に含まれております。

我慢ならない人はバックしてください。

このキャラ変だとか

俺の嫁！な人も私初心者なので勘弁してください。

誤字脱字の報告や書き方がおかしいなどは指摘して頂けると有り難いです。

ブログ 変わらない日々

いつもと変わらない日々。

それはある者にしてみれば眩しく映りある者にしてみれば平和を実感させまたある者には、幸せを与えた。

そして

俺にはとても眩しく映りすぎて…とても不快だった。

いや、不快というのは間違いか。

いつもと変わらない日々。

それは俺にとってもやはり幸せなのだろう。

ただそれは普遍、そして不変過ぎた。

たぶん俺は焦っているのだろう。

人生50年、といまや3桁まで人間が生きられる時代になってもそう言われる。

まあ実際問題そんな長生きしても何があるわけでもないし、50といわず30にもなれば体は衰えを明確に伝えてくる。

そう、自由を謳歌できるのは親から解放されて20年もないのだ。下手すると40過ぎてても親に縛られて生きていくのかもしれない。外国では老後をどう楽しく過ごそうかと定年を楽しみに待つそうだ。日本ではその逆で、定年したら別の働き口があるだろうか？と不安になるのだそうだ。

そういう俺も一人の日本人。

それはやはり第2の人生たる老後ですら、俺には不変と不安にしか映らなかったのだろう。

まあそんな小難しいことを言っても自分でもわからないわけだが…。

ぶっちゃけ、自由とスリルが欲しい。

2次元に逃げる？とづくにやっている。

なんとか現実逃避でこの欲求を満たしているが、果していつまでもつか…。

女？この欲求の前では性欲など霞んで見えんよ。

なんか面倒事ないか…？

仕事以外で。

………。

………はあ。

俺も歪んでいるよな、大概。

まあ自覚しているし歪んでいるほうが世の中楽しいとは思ってから矯正しようとは思わないが。

「高音3尉！聞いているのか！作戦開始だ」

…現実逃避中止。仕事に戻ろう。

「…了解。第3小隊、前へ」

「…了解」「」

まあ今何をやっているかというところ、自衛隊で訓練中だ。これがまためんどくさい。

演習場の山の中で敵の陣地に攻撃を仕掛けるとというのが俺たちの役割なんだが…。

まず緊張感がない。張り切っているのは上司うへの人たちばかりで俺たちは姿を隠ぺいするのも中途半端で、やる気なんか微塵も感じない。

「なあ光輝？この前貸したゲーム、どうだったよ？」
現に作戦中だろうが話しかけてくる奴もいる。

……やべ、こいつの名前忘れた。
ゲームは覚えているけど。

「あゝ。主人公がヒロインに誤解されて殺される場面…あれ中々よくできているし凝っている。俺は好きだな」

そんな風に話しているうちに作戦が終わった。
なんだかんだで無駄話しながらでも出来るもんだな……。

それよりも体力落ちたな…。

まあ明日から3日間休みがあるし、久々にキャンプにでも行くところ。
一人で。

……なんかいった奴前でろ。

プロローグ2 唐突に終わる日々(前書き)

自重前には18禁要素が入っていたという…。
触手で。

やりすぎたので普通に殺しました(笑)

プロローグ2 唐突に終わる日々

さて、待ちに待った休暇だ。

大きなバックパックにはバーベキューをするための用品や調理道具、趣味の燻製セットも持ってきた。

大型のテント（このタイプが好きだったから）は車に積んであるし食料も多めに持ってきた。

そして何より忘れてはならないのが自作のナイフ2本（銘はそれぞれシャニー、シュタイナー）と自作の逆刃小太刀「廃土」。

趣味が高じて制作してしまっただうえ何度も失敗を繰り返して、なんでもかやばいくらい斬れる。

……まあサバイバルナイフの代わりくらいしか使い道が無いので使っている。

「それにしても…やはり自然はいいな」
静かだいてかつ生命力にあふれている。
そしてかつ……つまらない人がいない。

…これ重要。

まあいいか、とりあえず飯を取ろう。

近くに川があるから釣り具も持ってきている。

「……大漁だな。そして豪華な夕飯だ」
目の前にはバーベキューに鮎の塩焼き、山菜サラダ、カレー。
多めにあるがそれをゆっくりと時間をかけて食べるのもたまには良
いものだ。
そして星を見ながら煙草を吸う。

「…ふ」

ああ、とても満ち足りている。

でも物足りない…。

仕方のないことだな。

「なんか面白いことでも起きない…か。……火が弱いな」

目の前で燃えている火がそろそろ消えそうだ。

ガサ…ガサ……

「！…なんだ？」

野生の動物か？一応火を強くしておこう。

あとは右手に廃土、左手にライトを持つ。

パチ…パチパチ。

火が強くなってきた。

これならそうそう近寄ってこないだろう。

ズル…ズルズル…。

普通の野生動物なら。

ポトポト…ズル…。

「!?!…さすがにこれは予想外だろ」

なんなんだあれは!?

足が無い手が無い何より顔が無い。

見た目が巨大な肉の塊みたいな醜悪な物体だった。

グシユルグシユル!!

「ツチイ!!」

突如として肉から無数の触手が出てきてそのうちの数本が光輝に向かってきた!!

廃土で急所を狙ってきた触手を払うと同時に逃げだす。

ビシッ!!!

触手に左手の甲を抉らえたか!

「!ライトが!!くっ!!!」

幸い大きなけがではない、それより早く逃げ出さないと!!

アレはやばい。

どんなふうにとはいえない、説明できっこない！

アレはココにいていいものでは断じてない！

その時右足に何かが絡みつく。

「！しまった…くそっ！はなせっ！」

そのまま動きを封じられてしまう。

胴体と首、四肢に巻きついてきたのだ。

…おい待て。こんないやな予感しかしない恰好。

ホラー映画とかで見たぞ。

「畜生！はなせ！！！！！」

……ああ。

俺死ぬのか。

つまらない日常に生き、よくわからん生物に殺される訳…か…。

体に力が入らない。左手が特にだ。

あの傷から麻痺毒でもはいったらしい。

意識が朦朧とする。

このまま食われてしまうのか…。

ブチブチという何かが切れる音。

ドストス！！ドドドス！！！！

無数の触手が体を貫く感触。

そこで俺の意識は闇へと消えた。

プロローグ3 転生(前書き)

プロローグ3つはさすがに長すぎるかと思いましたが、気にしないでください。私は気にしません。

プロローグ3 転生

「……！！！」

まだ生きている！？

おかしい…確かに殺されたはず…。

「…夢？ではないな？ここはどこだ」

どこを見ても白白白。

病院でもない。

死んだ時の恰好そのままだ。

「…間に会ったか」

「！？誰だ！？」

いきなり目の前に現れたのは血塗れの老人。

「お前は奴に殺され、死んだ。…それはわかるな？」

「…ああ。どうやらそうらしい」

なんだ死んだのか。

随分あっさりとしているが。

「お前はそれにより、輪廻より外れてしまった。」

「つまり俺という魂はこのまま朽ちる…と」

老人が頷く。

やっぱり。しかし殺されるとは思ったが、まさか魂ごと殺されると

はビックリだ。

「…あんまりショックそうじゃないのうお主」

「…別に、あんなツマラナイ世界に何度も生まれる様な生き地獄よりは消滅したほうがマシというだけだ」

「じゃよな〜。やっぱあの世界つまらんよな〜作ったんユグドラシルの坊主じゃけど」

……。

「……………それで何の用だ？このまま終わらせるつもりが無いということか？」

「え！？そこスルー?!地の文ですらスル ですか!!!?」

……………「…すいません説明しますから無だ

けは勘弁して下さい」

「よし許可する」

(なんか納得いかん!?)

はあ…と肩を落とす老人。

しかし最初に言った通りこいつは血塗れ。

こいつが平気そうにしているから、だんだん特殊メイクに見えてきた。

「ずばり言おう！奴は危険じゃ、奴を滅してくれ」

「いいだろう」

「即答!?!」

「退屈しないなら何でもいい。そのあと死のうがなんだろうがな」

「じゃが少しは無理だ〜とか怖い〜とかないんか？」

なんでだ？

「…すぐ目の前に送ったって無駄だって分かってんだから、どうせ時間くれるんだろ？」

「なんじゃつまらんのう」「いい加減潰すか」御免なさい嘘です。大体1000年くらいですハイ」

とはいったものの人間に勝てるものじゃないので色々魂を弄って強化することになった。

なにか希望はあるか？と聞かれたが特に何も無いな…。

「本当にいいんじゃない？」

「ああ、好きにしる。どうせ奴を殺すまでの生だ」

「…勿体ないのう。ならお主の頭の中から適当に選ぶからな」

(他の転生者はどいつも注文が多かったんじゃが、こいつ変わってるのう)

イケメンとか最強とか能力とかe t c

(でも困ったのう…：なんか今日何食べたい？って聞いた後何でもいって返された気分じゃ)

あれは随分たちが悪いからのう。

まあ適当でいって言ったし…：容姿と声はワシが決めちゃおう。

「？なんか気持ち悪い気配がしたが…？」

(何この子読心できんの？それとも勘がニュータイプなの？)

「いくぞい……」

「ああ」

スッ！

「……なにがでるかな！なにがでるかな！ちゃらららららん」真面目にやらんか」パギョ！！……ああ！サイコロが止まった」サイコロを抱えて……。

「大当たり……え……何々？」

【基礎能力EX+好きな能力】

「……」

「……能力じゃなくて武器で手を打とう。あと俺の殺される前の荷物」

「すまん助かる、さすがにそれやったらわし力尽きちゃう」

「……よしおれが昔考えた武器を作ってくれ」

「ふむ……」

【名称：精霊剣コールディーヴァ（世界歌いし精霊姫の小剣）

精霊姫ティターニアの小剣。

形：刃渡り30cmのナイフ。刃はオリハルコン、刀身と柄にはそれぞれの精霊王石（自然を司る精霊たちの王が持つ王たる証の寶石。この剣には木火土風水光闇）がはめこまれている。片刃】

「どのような能力がつくかは分からないが……まだおつりがくるのう」

「……もついいぞ？」

能力1つにどれだけコストがかかるのか興味がでてしまう。

老人はむう……とうなった後手をポンッと叩き

「草壁五宝やろう」

と言った。

「……まあ貰える物はもらっておくか」

魂の強化が始まった。

俺は言われたとおりに目を閉じている。

「終わったぞい」

「そう、結構短いな…？」

………声高くなつた俺。

そつたとえばシャナとかルイズみたいな釘宮ボイス。さつき受け取つた荷物から鏡を出して顔を写す。

銀髪の角川の人魚殺してみたいな髪型にに鋭い目つきの真紅の瞳。^{ヘルンヘイブ}
細く華奢になつた体には薔薇マリのマリアが後半着ているHnHブ
ランドの服。

服は違うが、俺が書いてた小説の主人公だった。

身長が10歳くらいに縮んでいる。

「……まあランドムだから仕方ないか…」

(すんませんその姿形はワシのせいです)

そろそろここを離れる時が来たようだ。

「……時間じゃ。転生してすぐに迎えの者が来る」

「荷物や武器は？」

「荷物は迎えの者に先に渡しておく。…草壁五宝は……ホレお主の左右の爪に封印しておるだろう」

言われて爪を見れば成程、左右の爪には陰陽師でよく見るような文字が5つ刻まれていた。

「コールディーヴァは…ホレ、ベルトと鞆もセットじゃ。能力はあつちで試すがよい」

そういつて老人は俺に精霊剣を渡し、後ろに光の扉を開いた。あれを通ればすべてが始まるのだろう。

「忘れとつた！そういえば以前の名前は使えんぞ。今考えておくがよい」

「そういうのは先に言え…白堂はくどう 冬真とうま…わかるだろっ？このキャラクターの名前だ」

「うむ。いくがよい。冬真よ」
俺は振り返り前へ進む。

光の扉に触れ…

「あ、そういえばお前結局誰なんだ？」

「それ今更！？わしはk」

悪い。聞こえなかった。

俺は光に包まれた。

プロローグ3 転生（後書き）

精霊剣やキャラクターは事実です。高校時代に書いていてそのままお蔵入りました。そのうち生き返したいと思っています。

第01話 賢者との邂逅（前書き）

幻想郷の歴史ってウイキ見てもよくわかりませんね…。どこかに幻想郷縁起落ちてないかな…。

第01話 賢者との邂逅

「あら？来たのね」

声が出たので目を開けるとそこは日本式の屋敷の庭だった。

しかし目の前に現れたのはそんな屋敷とは全く違う金髪の女性だった。

陰陽のしるしの入った中国風の服と洋風の紫色のドレスを組み合わせたような物を着て、頭にピンクの寝るときに被るようなやつを被っている。

……なぜか頭の中に空白ができているような違和感がある。

「…はあ。管理神さんまだ伝え忘れていることあるじゃない…痴呆かしら？」

「……？どういうことだ？」

そういうとその金髪の女性は俺の頭をその綺麗な手で撫でながら言った。

「いい？今の貴方は世界の修正力を受けていて、その世界をなんらかの方法で知っていた場合その世界にいる間だけその世界に関する記憶が封印されるの」

「ああ…そういうことか。やっぱりあの爺殴っておけばよかった」

金髪の女性はふふっと笑うと「貴方可愛いわ」といって抱きしめられた。

「幻想郷にようこそ、私はスキマ妖怪の八雲やくも紫よむかし。貴方を迎えに来たわ」

…ぶはつ。

俺は何とかその豊かな胸から顔を上げた。

「白堂 冬真だ。これから世話になる、紫」

「それにしても冬真ったら、抱きしめているのに何も反応してくれないのねえ」

「いや？結構頑張って平常心を保っているが？紫は綺麗だから」

「…女性の扱い上手いのね」

「女性に好感を持たれた覚えは今までないが？」

「…天然かしら？可愛いから許すけど」

「ここが冬真の部屋ね。先に来た荷物はそれと…あと車とかいうのは玄関前に置いてあるわ」

案内されたのは居間の隣の襖を開けた部屋だった。

紫は相当気に入った様で後ろから抱きしめてきながら、浮いてついてくる。

後頭部に胸が当たっているのでもちよつと…いやかなり気になるが本人も分かった上でやっているのが分かっているので、まあいいか。
スル だスル。

俺のバックパックはその結構広い畳の部屋の真中にドンと置いてあった。

「それにしても生前は成人男性だとしてもよくこんなに大きなもの人間が背負えたわね」

「俺は自衛官だったからな。これぐらい当たり前前に背負える…」

「自衛官？」

「…まあ軍人だ……」

「…もしかしてこれも聞いてないのね…今は貴方がいた所より1000年近く前よ?」

あの爺…。

殴りたい、嗚呼殴りたい、あの爺。

「…まあ、今はどうでもいい。それより俺は何をすればいい?ただでおいてもらおうとは思わない」

「あらしつかりしているのね じゃあ家事、やっってもらえる?」

「了解した」

こうして俺と紫の共同生活が始まった。

「同棲でいいじゃない」

「それはない」

第02話 能力発現

あれから数週間。

大変だった。何が大変かというと…。

「釜戸…炊飯器は…ある訳無いか。っ！火加減難しいな……」

「風呂入るか…っ！あゝ薪割忘れた。今からで間に合うか？」

「…ていうか自衛隊で寮生活してたから殆ど料理できなくなってるんだよな…勉強しよ」

「洗濯は…タライと洗濯板だよなやつぱり。て言うかこの下着…。わざとかそうか…よしスルーだ、普通に洗ってやる」

「…紫。この時代の貨幣がよくわからん」

普通に生活するのに慣れるのに大変だった。今は結構できるようになったからいいけど。

「んゝ おいしいわゝ。上達したじゃない冬真」

「ありがとう。でもまだこれじゃあ普通のレベルだ。それにそろそろ時間に余裕ができてきたし力の確認もしなくては」

そう。まだ俺がどのように戦えるか分からないのだ。昼食の片付けをしてから庭に出る。

「見ててあげるわ。あと結界張ってあげる」

「ありがとう…さて」

まずは草壁五宝か。

左手のひらを鞘に見立てて右手を当てる。

…こんな感じだったか？

呪文は頭に入っているから大丈夫だな。

「かき 牡籥おんかけおん闔かすか総光の門

しちわくしちせい 七惑七星が招きたる、ゆらいそつらう 由来艸阜の勢

こもん 巨門こもん零零、くしと急ぎて律令の如く成せ

ちとせ 千歳の儔、とせがら 小烏丸天国！！」

右手を引き抜く！

光がおさまるとそこには一つの刀、小烏丸天国が出てきた。

「…へえ、凄いじゃない」

「……………できた」

そのまま続けて火車切、雷切、鉋切、童子切と試してみるとすんなり出てきた。

「……………これ出すだけで少し疲れるな」

「いやいや童子切出すので疲れたで済むのは十分凄いわよ？」

さて次は、確か身体能力がEX（EXってどのくらいだ？）だと聞いているので軽く跳躍してみる。

シユン！！

「!？」

結果：軽くなのに一瞬で一番大きい山より高く飛び上がりました。

「あ…着地考えてない」

こういう時、俺が飛行できる存在だったらいいのにな。

あゝ落ちる。目瞑つとっつ。

「……………あれ落ちない？て言うか俺浮いてない？」

目を開けるとはるか下から紫が見上げながら啞然としていた。

これ動けるのか？

スイ〜スイ〜…。宙返り〜…。

普通にできた。

とりあえず次だ。降りよう。

「冬真ちよつと待つて。貴方に飛行能力なんて無かつたはずよ？」

紫が目の前にやってきてその通りなことを言ってきた。

確かにそんな能力貰っていないし、身体能力だけで飛べるはずもない。

「？なんでだろうな…なんか落ちる時少し後悔して【俺が飛行できる存在だったらしいのにな】って思ったら浮いてた」

そういうと紫は少しびっくりして「ちよつといいかしら？」「といて俺の頭に手を置いた。

「呆れた。貴方規格外ね」

「…なにが？身体能力か？」

あの爺余計なものでもつけたのだろうか。

「いいえ、あの人は関係ないわ。ただ貴方が私という存在と一緒にいる間に能力が発現したのよ。そう例えば風邪をひいた人の近くにいた人が風邪をひくように」

「……………え？」

「それならまだ、原因は分からないけどあり得ないことじゃないわ。問題はその能力よ」

「…どんな能力だ？思ったことができるようになるのか？」
そういうと紫はまた俺を抱きしめてこういった。

「そのほうがまだましよ貴方の能力は……………」

「存在と定義を操る程度の能力よ」

おい。

第02話 能力発現（後書き）

ぶつちやけ存在とか定義とかよくわかりません。

第03話 チートになるつもりはなかったのに(前書き)

オリジナル宝具の矛盾点は置いてください。

高校時代の駄作なので(笑)

主人公にとって紫は手のかかる姉みたいになっていきます。

第03話 チートになるつもりはなかったのに

「存在と定義を操る程度の能力」

存在そのものを創りだしたり、既にある物・者・現象の存在を操作、またはその存在の定義を操ることができる。

例えば俺という存在に飛行できるといふ定義を追加することで飛べるようになったり、ここにリングという存在があると思えばリングが出てきたりする。

他にもとても重い剣に「この剣の使用者のみこの剣の重量はゼロになる定義」とすれば、どんなに非力な奴でも徒手空拳のごとく扱え、当たった敵はその重量の乗った攻撃をもろに食らう。

…とか。

「……………正直むちゃくちゃだ」

「…まあ弱くてすぐやられるよりはいいかもね」

まあやってみようか適当に。

俺という存在に「体に何でも纏える、それを操作できる」定義を追加。

じゃあまず簡単そうだから…右手に風？

ギューイイイイイ！！！！

「おお…右手に竜巻が…って勢いがおかしいから」

音とか某スーパードボットみたいだし。

ファイナルアタックとかできそうだし……………やらないけど。

そのまま案山子を創りだし軽く当ててみる。

ガリガリガリガリ！！バキィ！！！！

削れた。余波で折れた。

今度は離れた所に丸い鉄板を創る。

腕を振って飛ばせるか試してみる。

ボクシングスタイルから…右フック。

ヒュン！バシン！

…なんか飛んで鉄板へこんだ。

次はストリートをチヨイ強めで。

ブン！！ギューイイイイイイ！！！！バキィ！！！！

風穴が鉄板に空いた。風だけに。そして碎けた。

某子供先生の魔法の雷抜きバージョン拳大圧縮版が出来てしまった。

「……………化物ね」

「それはいうな」

お互い様だろうが。

「まあ可愛いからいいわ」

「……………はあ。さて最後だ」

そう、これだけは何が起こるか分からない。

爺もそう言っていたし、これは俺の切り札にもなる存在だ。

腰に巻いていた何故か虹色に淡く輝くベルトと同じ色合いの鞘から大型ナイフを抜く。

精霊剣コールディーヴァ（世界歌いし精霊姫の小剣）である。

刀身はオリハルコンの黄金色に輝き鑄はミスリル銀、柄は生命の樹セファイロトの枝からできている。

仮想の伝説物質がこれだけで3つも使われている

……俺オリハルコンしか言っていないんだが？

さらにそれぞれの両面には精霊王石が埋め込まれている。

「説明聞いているだけで目眩がしてくる」

「…私もよ。というよりそれに『恐怖』しているわ。持てるだけで凄いわよ」

そうだ、解析してみよう。

正直このまま使うのが俺は怖いし、解析って結構興味ある。好奇心旺盛だからな。

(魔眼でいいかな)

見たモノの情報を記憶できるようにしよう。

アナライズ・アイ。右目に定義追加。

そのままコールディーヴァを見つめ。

「解析：開始」

瞳孔に狙撃銃の十字見たいのが現れ、それと同時に情報が流れ込む。

それと同時に脳がメルトダウンしそうになる！

「ぐううう！！脳保護の定義追加！……紫支えていてくれ」

「え、ええわかったわ」

ふらつく体を後ろから支えてもらいながら、情報を読み込んでいく。

解析……………

名称：精霊剣コールディ ヴァ（世界歌いし精霊姫の小剣）

製作者：精霊姫ティターニアを信愛する精霊達

創造主：高音 光輝（現在は白堂 冬真）

所有者：精霊姫ティターニア 白堂 冬真

由来（設定）：歌を愛する精霊王の娘、精霊姫ティターニアの「世界を想う歌」に感激した精霊王とそれぞれの属性の精霊達が共同で創りだし送った小剣。

能力：『精霊の絆』：それぞれの精霊の集合体を召喚することができる。

『精霊の加護』：身の危険の防御や回避、適応などができるオート能力。

『奇跡の歌』：柄の部分に住みついた音の精霊により、歌を歌うと力となって広範囲に広がる。なお歌ごとに発現する力は変わる。

『世界を想う歌』：周囲の決めた範囲内の精霊達を浄化、活性化する。

真名解放：害なすものに滅びそのものをぶつける七色に輝く極太の精霊砲（精霊たちの思いの集まり）を先端より発射する。味方には無害、敵のみに当たる。

素材による追加アビリティ：『オリハルコンの刃』切れ味、破邪

『ミスリル銀の鎧』精神防御、障壁

強化

『生命の樹の柄』神の加護、生命力・

再生力強化、成長値上昇

……………以上。解析終了

「……………」

サラサラサラ…。

「紫、これ解析結果」

紙に書いて渡す。

それを呼んでいるうちに紫は段々呆れた顔になって、

「今日はもうやめにしましよう……疲れたわ」

屋敷に戻って行った。

…俺も戻るか。

そのあと、疲れた原因なんだから癒せとか言われて風呂に引きずり込まれ、さらに抱き枕にされてしまった。

…もはや何も言つまい。

第04話 そつえば死んでから三途の川見てないな（前書き）

久しぶりの投稿。パソコンとケータイの両方なので勝手に違うので書きにくい件。

第04話　　そういえば死んでから三途の川見てないな

あれから1000年間は紫がまだ出ない方がいいというので、能力を使って鍛錬と家事の毎日を過ごしていた。

銃器が欲しいからと創りだして見たり。

紫のスキマを真似したら倉庫とスキマ、両方の効果を持った狭間（命名スキマEX）を創ってしまったり。

武術の達人を複製した人型に体術を教えてもらったり（料理や家事も同様に）。

新しい魔法体系を創ってみようとしたり（現在行き止まり）。

元々持っていたナイフと小太刀に定義で能力を付加してみたり。とりあえず思いつくままにやってみた。

そうしたら体がまた少し大きくなっていった。

「いや、当たり前でしょう？貴方まだ人間よ？成長するわよ」「そうか…… やつと20歳まで戻れた訳だ」

まあそれでもこのキャラクターが元から小柄なせいかな身長が158cm、と理想の身長には程遠い。

そのせいでいまだに紫の愛玩動物だ。

あれ？でもこれだとすぐに死んでしまうのでは？

「不老不死の定義を追加すればいいじゃない」
それもそうか。

少年（男の娘？） 定義追加中……

「はい、終わり」

「え？それだけなの？」

もう慣れた。

そんな事が会ったのが90年前。

「ねえ冬真〜」

「…なに？」

「今日は麻婆豆腐がいいわ」

「……了解」

存在の創造が出来るようになってから、今はまだない食材や香辛料なんかも取り出せるようになっていた。ちなみにアカシックレコードに接続できるように俺に定義追加したら制限はあるけど出来るようになった。

これにより俺が生前知らなかった料理のレシピや食材その他諸々も知ることができ、創造が出来るようになっていた。

…まあそのおかげで唯一お買い物ものという仕事があった紫が「じゃあお買い物も必要ないわね」といって完全にニートと化した。

「今失礼なこと考えたでしょう」

「本当のことだ……麻婆豆腐、泰山風にするか」

某神父のごとく。

「酷い…そういえばいい加減貴方に会わせろって言ってたわね…閻魔が」

「は？閻魔？」

「そうよ。この幻想郷担当の閻魔、四季映姫・ヤマザナドゥ」幻想とはよく言うものだ。

まさか妖怪に会ったと思ったたら、閻魔に面会する羽目になるとは…。そのうち神とかでてきそうだな。

何？フラグ？メタはよせ。

「…忘れちゃいそうだから今から行きましょつか、帰ってきたら麻婆豆腐よろしくね」

「っ！？問答無用か…仕方ない行ってくる」

いきなり落とし穴よろしくスキマに落とされたので、俺は身を任せて落ちて行った…。

スタツ…。

「よつと…。ここは川…か？」

スキマを抜けたので体勢を整え降りてみると、向こう岸の見えない川が目の前に広がっていた。

周りに彼岸花が咲いている…という事は…。

「まさか生きたまま三途の川を拝むことになるとは…」

この浮いている半透明のものたちは幽霊だろう…川で石積みをしているのは子供の霊か…。

しかし閻魔のいるところに行くにはこれを渡る必要がある訳だが、渡し守がいるはずだ。勝手に飛んで渡ろうとは思わないし、泳ぐなんて不安要素が多すぎて嫌だ。

「…あれか？」

少し歩くと一隻の小船と、その近くの岩に座っている歪んだ鎌を背負った女性が見えてきた。

「もし…渡し守か？」

近づいて声をかけるが反応は無い。

回り込んで顔を覗きこんで見ると、なんとも幸せそうに船を漕いでいた。夢の中で。

仕方ない。

俺はそのまま一枚の符を取り出して『ウェイクアップ』と呟いた。

そしてそのまま顔を見ていると「ん~~~~」と目をしばしばさせながら起きた。

「おはよう、でいいのかこの場合」

「…!!ひゃいつ!?!?おおおお、おはよう!?!?」

…顔が近すぎたようだ。

「俺は白堂 冬真だ、閻魔に呼ばれたのだが…」

「ああ、アタイは小野塚 小町…え!?!?映姫様に!?!?」

そう聞くと顔を青くして「あんた、一体何しに行くんだい？」と聞いてきた。

「いや、なに俺は今八雲 紫という妖怪の家に住まわせてもらっているんだが…いきなり今日、閻魔に挨拶してこいとな」「そ、そう

か。分かった！運んでやるよ」

「ああ、有難うそれじゃ（グウ）・・・」

「うわぁ！わ、悪いまだ飯食ってなかったんで」・・・
腹が減っているのか。まあさっきまで寝ていたみたいだし。

魂を扱うのだから大変だろう。

スキマから握り飯とお茶を出し渡した。

「良ければ食べないか？」

「え？いいのかい？いやぁ本当悪いね」

「いや、お疲れのようだからな。差し入れの様なものだと思うてくれ」

まあ実際お節介だしな。「っ！あんた・・・それは反則だよ・・・

（無表情かと思っいたらいきなりそんな可愛い笑顔・・・）」

食べ終わったと思ったら顔を赤くした・・・。

暑いのか？デザートにアイスクリームあげよう。勿論（？）チョコ味だ。

「あ・・・ありがと...と、冬真」
名前呼んでくれた。

「どういたしまして、小町」

「~~~~~!」

「ふふ（やっとまともな友達が出来たな）」

「……………何ですかああああっ!!この甘酸
っぱい空間はあああああ!!」

「わあ!」

「?なにがだ?」

誰かがツッコミを入れてきた。

……………ああ。目的忘れてた。

俺、閻魔に会いに来たんだった。

第05話 一生懸命怒っているチビツ子はなぜか可愛く見える件 b y 冬真 (前書き)

応援くださった方ありがとうございます！

仕事の合間にやっと投稿できました！

これであと10話書ける！！

冬「…相変わらず目標の低い奴だ」

作「謙虚といいなさい」

冬「…絶対違うと思う」

町！」すいません！……！」

ちなみにここにきてすぐに抱き上げました。

なんか口うるさい所とか、それでいて素直じゃなさそうな所が妹に似ていたから……つい、な。

「まあ……もうそれぐらいでいいじゃないか映姫。それにさすがにおなか減っただろう」

と、ちょうどいいところで膝の上の映姫にスキマから出したシヨコラケーキを差し出す。

ちなみに、自信作だ。某錬鉄の英雄にも劣らないだろうと自負する。既に100年もの間続いている趣味でもあるし。

（（ごくり、お、美味しそう））

2人とも心の声丸聞こえである。

ていうか閻魔の心の声とか……。

「さあ、あらためておやつにしよう。2人とも紅茶は好きか？」

「どうだろう？あたしは飲んでみたいかな？」

「し、仕方ありませんね……今回はこれで許してあげましょう」

「わかった、少し待っててくれ」

なでなでなでこ。

「だから撫でるなああ……！」

なにこの可愛いのに。

顔真っ赤にして、何この可愛いのに。

100年ぶりに癒された気がする。

まあ紫には少し前に美味しく頂かれたのだが……気にしない。

まああれも可愛いものだったが。

そのままお菓子で釣り続けて、なでなでして俺は帰った。

帰る時に上目遣いに「…今度はいつ来るんですか？まだ説教が途中なんですから早く来るように」

なんて言われてさすがに俺も数十年ぶりに無愛想顔を崩してしまっ
た。

その時やはり変な顔していたのだろうな。映姫はささっとそっぽ向
いてしまった。

こんなところまで妹に似ているなんてな。

とりあえず撫でておいた。

小町は俺の顔をじっと見ていた。

少し恥ずかしかった。

「じゃあまた」

「あ、うんいつでも来ておくれ。冬真なら大歓迎だ」
そう言っつて小町は微笑んだ。

「あ、…冬真ちょっと待っておくれ」

「?……!？」

どうしたとか、なに?とかは言えなかった。
唇にいきなり感じた柔らかい感触に思わず、思考が停止した。

「…さすがに会ってその日のうちに「嫌だったのかい?」…嫌じゃないが」

「多分一目ぼれなんだろうさ…。でもやっぱり冬真はいい男だったから…したかったんだよ」

…その気持ちは嬉しい。けどその一目ぼれしたのは俺（理想）であって俺（現実）ではない。

「…なんか勘違いしているようだね…あたしが好きになったのは…冬真の内面だから…さ」

そんな、淋しそうな顔をしないでくれよ、と言ってくれた。

「有難う、またくるよ」

小町の頭を優しく撫でて、俺は家に帰った。

帰還方法?自前のスキマ（紫と違って目玉は無い）を垂直落下だが何か?

紫に仕返しとして体の上に落下してやったら、既に読まれていたらしく、キャッチされて布団に引きづり込まれた。

あれか？お前は食虫花か？布団開いてそのまま受け入れOKってか？

ッア

てか麻婆豆腐いらないのか？俺を食べてるから明日でいい？

……さいですか。

ちよっ、さすがに連続8Rはきついから。

不思議な人間でした。
いや人間のまま不老不死化しているのも不思議というか珍しいんですけどね。

なにより白黒つけるはずの私の能力で判定ができなかったんです。
白でもない黒でもない、だからって色彩鮮やかな訳でもない、どちらかという寂しそうな心でしたね。

でも…嫌いではないですね。彼の心の色は無色透明が一番近い気がする。

そしてどんな色でも受け入れられる大きなもの。

それはとても強く純粹で、とても儂い心。

見せてくれた笑顔も少し寂しそうだった。

まるで今はもう無いものを慈しむかのように。

「はあ…」

わかれたばかりの彼を考えると少し淋しく感じるのはなぜでしょう。

さっきまでずっと撫でられていた頭もちょっと淋しいです。

ちょっとだけ見てみましょう。

たしか浄瑠璃の鏡は遠見も出来た筈です。

け、けして一緒に暮らしているという八雲紫がうらやましいという訳ではないですから！断じて！

さて、いつも紫はどんな羨ましいことを

！？

「昼間の仕返しだ。覚悟しろゆ（ガバツ）」「御帰りなさい、そして頂きます」「おいちょっと待て…あ、こちらやめ」

ッア　　。

うらやまゲフンゲフン！……紫は今度地獄…いえいえ説教しなければなりませんね。

そして冬真、可愛かったです御馳走様でした。

第05話 一生懸命怒っているチビツ子はなぜか可愛く見える件b y冬真(後書き

実はここだけの話…。

さっさとクロスしてしまえと私の本能が騒ぎます。

冬「…で？どうするつもりだ作者(LV1)」

作「とりあえずそのためにまた、冬真に能力つけようかと」

冬「…おい、何のためだ？」

作「むりくりクロスさせる伏線にしよーかと」

冬「…頼むからあまりチートにはしないでくれ」

作「ごめんもう遅い」

第06話スperlカードの起源は俺の暇つぶしだった(前書き)

作「さあ！伏線張るよ！判りにくいけど」

冬「どうでもいいが俺の性格はお前のを移されたはずだが…何故そんなに明るいんだ？」

作「多重人格者って知ってる？」

冬「…マジか？」

作「…っていいながら殴るなよ、判ってるんなら。ただの空元気だよ…社会人は愛想笑いが命だから」

冬「…強く生きてください」

作「ちなみに今回からキャラが崩壊します」

冬「いや、今さらだろう…」

第06話 スペルカードの起源は俺の暇つぶしだった

あれからしばらくして。

なんとなく魔力を込めて発動させたカードを見て紫が「あら？色々できて面白そうね。私も作ろうかしら？」

とノリノリで参加してきたので、数十年の暇つぶしに色々試して作ってみた。

お互いに発動して美しさを競ってみたり、普段はできないような攻撃が出来るとわかってからは弾の数を増やしたりしてみたり。

紫に不意打ちされたカードの弾幕を避けていたら楽しくなっていたり。

状況に応じたカードを創ってみたりした。

でも俺はあらかじめ魔力や霊力を仕込んでいるのに、紫はカードを『宣言用』と行って、あとはそのカードの表現通りに力を使っている。

……そんな難しいこと一々面倒だと思っただけど、紫は仕込む方が面倒らしい。

そうかこいつはチートだったな確か。

(お前もだろうが) 何も聞こえん。何も聞こえんぞ。

のちに、このカードを『スペルカード』

発動した技を『弾幕』

それをお互いに避けて勝負するのを『スペルカード戦』、通称『弾幕ごっこ』

というのだが、これが幻想郷に広まるのは結構あととなるのはまだ2人とも知らない。

そしてさらに後で、冬真が「！これが…世界の修正力か！？」と言ったり言わなかったりする。

「紫の防御は固くないつも…」

流石は境界の妖怪だ。

ちなみにこつちが正式名称でスキマ妖怪は俗称（？）らしい。

懐から次のカードを準備する。1枚辺り1分〜2分で終了するので
終わりを見極める。

「今度のは突破力重視だ…銃符『ブラックロックシューター黒岩射撃』」

左右一対の黒い砲身から次々と『防御破壊』の概念付加された黒い
岩が発射される。

結界にヒビが入ったのを見て、紫は慌てて突破されると同時に離脱
する。

「きゃあああああ！！かすった！今かすった！！」

追いかけるように連射される黒岩が迫るたびに紫が悲鳴を上げる。

どうでもいいけど紫…元気だな。

「いい加減反撃させてもらっわ…魍魎『二重黒死蝶』！」

反撃に赤と青の蝶が円運動しながら飛んでくる。

「規則性があつて避けやす…！？」

避けたと思ったらあいだを縫うようにクナイ型の霊力弾、さらに紫
が直接日傘を向け射撃してきた！

普段はこれら通常弾幕を張りつつカードで戦局を動かしていくのがセオリーだが、あえて通常弾を当ててきたのだ。まあ普通は、そんなことしないけどな。

「ふふふ！今回は私の勝ちね」
「まずいこれは直撃コースだ！」

……だがまだ甘い。

さらに三枚目のカードを出す。

「炎・軍符『獄炎赤壁』」
バニングクリフ

「いまさら何を…嘘!？」

目の前に燃え盛る壁が出現し、命中した弾が速度を上げつつ火だるまになって紫に向けて反射していく。

…まあ所詮優しい王様の帯電反射盾の炎版だ。

さらに駄目押しと離脱しながら直接紫に向けて誘導性のあるタリスカード霊撃符を投げつけ、さらに同じく誘導性のあるイリテスタ魔力弾を発射。

目に見えない速さで創造したタリスカードを投げつけつつ、返す手でイリテスタを撃ちこみながら紫の出方を見極める。

(一々創造してから投げるのって…結構疲れるな)

今度から投擲武器用のスキマ倉庫創って貯め込もう。スキマ開くくらいなら全然疲れないし。

ん?……結界で防御か…そのあとカードで不意を突いて決める気だと見た!

これは………先手必勝だな。

変わらず連射を続けながらカードを宣言した。

「霊・魔符『エルゴフォーレブラスター』」
これは霊力と魔力を融合させたらなんか出来てしまったある意味相乗砲撃だ。

それだけでも恐怖極まりないのだが、ホーミングまで付いているからたちが悪い。

…まあ特別製なのでチャージが必要だったり、隙が大きかったりするんで、今回みたいに相手が防御に徹している時や通常弾幕で時間を稼ぐ必要があったりする。

「…それ、オーバーキルよね（汗）」

紫が悟りきつた顔で障壁を張って（何気に全力）そのまま砲撃の渦に巻き込まれた。

大丈夫。死にはしないさ。

あと白い悪魔言った奴…スキマ倉庫の裏に来い（物理的に無理）

第06話スぺルカードの起源は俺の暇つぶしだった（後書き）

冬「最後の砲撃スぺルの『エルゴフォーレ』ってなんだ？」

作「中学校当時から考えていた『意味はないけどなんとなくカッコいいかな？』と思った必殺技名集』より抜粋しまひた」

冬「…厨二だな。言いたくはないが」

作「もう受け入れたよ。」

ちなみに当てもこの技が君の必殺技です」

冬「…おい」

第07話 邂逅し合わない筈の人々（前書き）

予想以上に投稿が遅れました。

期待している人はいるかどうか分かりませんが、すいませんでした！
これからも余裕で遅れる可能性大です…。

例のあの人が人格ブレイクです。

冬「元々厳格な人だったはずだが？」

作「…彼は強く生きたんだよ。それより戦闘描写が自信ないんだが？」

冬「…強く生きてください」

第07話 邂逅く合わない筈の人々

「…やりますね」

「ふ…お主こそやりおるわ」

今、俺は白玉楼の庭で魂魄妖忌こんぱくまじと言う人と手合わせをしている。

分かる訳無いよな…はあ。

…よしダイジエストだ。

結局数十年の筈が何百年とカードで遊んでいた(？)

紫が「そろそろ挨拶まわりでもしてきたら？」と言ったので、それもそうかと家を出た。

その時に最低でも回るように言われたのが白玉楼、妖怪の山、永遠亭の3つだった。

あと紫が話したので相手方はもう俺のことは知っているらしい(ど
ういう風に知っているかは知らないが)

ちなみになんでそろそろかと言うとよくわからないが、外の人間が妖怪を畏れなくなってしまう、妖怪の力が急激に弱まってしまふのを防ぐため外の世界と幻想郷を結界で分けてしまおうとしているらしい。

結界を張るのは紫、俺、あと前々から目を付けていた博霊の巫女の三人で、今紫は幻想郷中の住人を説得して回っているとか(ぐうたらしてたわけじゃないらしい)

だから顔を見せてこいという事だ。

そして白玉楼には紫の友達がいるというのでじゃあそこから行こう、と飛んだ。

目印は冥界にある長い長い石階段。

紫にもらったメモを見ながら

「確かここにいるのは…西行寺 幽々子と魂魄 妖夢か。2人とも女…と」

門が見えてきたので降り、門を叩く。

「はいはいどちらさまですか？」

刀を二つさげた銀髪のショートカット少女が現れた。メモを見ると…妖夢か。

「初めまして、白堂 冬真だ。今日は挨拶に来た」

そういつてスキマから出した一升瓶を妖夢に渡す。

「あ、これは御丁寧にどうも…！！貴方が紫様の言っていた美少女見たいな男の人ですか！本当に綺麗…」

(嗚呼…こういう風に知られているのか)
紫、後でシメる。

その時だった。

「待て…お主、出来るな？」

(あれ？こんな人いるって言ってたっけ？)

妖夢のように半身である霊体を浮かばせた鋭い眼光の老人が現れた。妖夢と似たような色合いの袴にやはり刀を二刀さげている。

「…白堂 冬真です。貴方は？」

そう答えると老人はまるで見定めるかのように見つめ「魂魄 妖忌。この子の親だ」と言い

シヤキイン！！

「！？何を！」

「！？妖忌様！？」

いきなり居合を放ってきた。
俺は半歩下がることで最小限の動きで避け、いつでも抜けるよう腰の廢土に手をかけた。

「…やはり、初見でこれを避けるとは…気紛れで帰ってきてよかったな」

「試した？そういう貴方も…ただものじゃない」

そういうと妖忌はフツと笑い、二刀とも抜いて構えた。

「手合わせを願えるか？冬真殿」

「…望むところです。妖忌殿」

久方ぶりに接近戦の良い仕合いが出来そうだ。

左手に右手を合わせ…

「牡籥かきかけ闔とびす総光の門

七惑七星しちわくしちせいが招きたる、由来艸阜ゆらいそつぼうの勢

巨門こもん零零、急ぎて律令りつれいの如く成せ

千歳ちよひの儔とも、小烏丸天国こまがら！！」

そしてそれを一度上に放り投げ、

「禄存ろくぞん零零、急ぎて律令の如く成せ

千歳の儔、鉦切長光！！」

出したと同時に落ちてきた小烏丸を左手でキャッチ。
シャキッ！

鉦切のギミックを展開し、妖忌と向かい合い…。

「でああああ！！！！」

「せああああ！！！！」

音よりも早く俺たちは斬り合い始めた。

そして冒頭に戻り…。

「魔神剣…双牙…！」

「霊衝波…2連…！」

ガツンガツン…！！

地を這う衝撃破同士が相殺し合う。

（妖忌殿の技は練りが違う。少しでも抜けた技を出したらやられる）
（冬真殿は反応と判断がとても正確だ。下手したらすぐに追い込まれる）

妖忌が低い姿勢で入り込んでくる。

（…隙を見つけた！）

「震脚・爆碎牙…！」

その場で右前足を踏み抜く！

込めた気力で目の前の地表が吹き飛び妖忌のバランスを崩す！

「ぬ…！」

「獅子戦吼…！」

さらにそこへ左の肩口を当て気力で吹き飛ばす！

「ぐう！気か…！」

たたらを踏み辛うじて防御する妖忌。そこへ

「幻狼斬…終わりです」

首筋に剣を当てて止める。

「…さすがだ」

「有難うございます」

「これなら妖夢を任せられる」

「…は？」「さらばだ！冬真殿！」いや待ておい…」

…行っちまった。

「冬真さん！いえ師匠！」

後ろを向くとキラキラした目をした妖夢。
しかも顔が近い。

「…師匠？」

そう聞き返すと「ハイ！なんでも紫様から、冬真は強いから剣を教
えてもらえば？と言われていましたので」

そう言つて一度頭を下げた。

「しかし、私の剣は妖忌様に教わった剣。妖忌様より強いとは思
いませんでした！しかし」

「分かった分かった…時間がある時にでも教えるから…それでいい
か？」

なんか長くなりそうだったので止める。

初め見た時、しっかりした大人しい子だなと思ったが、こんな風に
笑えるんだなと少し安心した。

そしたら蔓延の笑みを浮かべて、「有難うございます！師匠！！」
と抱きついてきた。

勿論避ける。

しかし、柔らかい何かに包みこまれる。

「ん？」「あらあら〜可愛いわね〜貴方が冬真君？」

上を見るとグルグル印の付いた三角巾を帽子の上に巻いた紫の髪の毛の女性…西行寺幽々子。

…ってこれは胸に埋まっているのでは？

「すまん、今どこからあ！？」

「あらあらどこに行くの〜？」

離れようとしたら、さらにぎゅっうっつとされる。

「幽々子様！？師匠を離して下さい！」

「ええ〜…可愛いから、嫌〜」

その後紫に教えてもらった食べ物で釣る方法で離れてくれたが…。

結局今日1日幽々子に抱きつかれていた。

「…勘弁してくれ」

あと2カ所は明日だな…。

おまけ

「そついえば妖忌様が負けたら後に、これを渡してくれと言われま
した」

妖夢が俺に手紙を渡してきた。

「え〜と何」

（冬真殿へ

妖夢の事をよろしく頼む。剣の事も勿論のこと、わしは冬真殿以外に妖夢を嫁にやるつもりはないからな)

……あれ？この人頭おかしいのでは？というか違和感があり過ぎるのだが？偶然って嘘だろ？

とりあえずは

「…ファイア」

ポッ

証拠隠滅。

「？何で燃やしたんです？」

「読んだら破棄しろと…」

嘘だ。

第07話 邂逅し合わない筈の人々（後書き）

早くクロスしたいけど…あらかたのキャラを出してからでないか…。

第08話 お調子物の天狗（前書き）

仕事がひと段落したかと思ったら、すぐ震災。

いや、大変だった。

というわけでやっとこさ投稿。

作「いやなんかもう、ホントすみません」

冬「…お前誰に謝ってた？それとも病んでるのか？」

作「病んでるのは前々からです」

冬「…もういい、死ねよ」酷っ！」「」

第08話 お調子物の天狗

「今日は絶対2カ所挨拶しよう…絶対」

妖怪の山を川伝いに登りながら俺は呟いた。

幽々子の奴…あの後俺のスキマ『食料用無限倉庫』の存在を知って
いたらしく（絶対紫だ）何度も料理をさせられた。

妖夢が横で「師匠！申し訳ありません！本当にすいません！」とこ
ちらも何度も頭を下げていたのも不憫だった。

あ後は久しぶりに怒っていたので紫にぶつけた。

「…紫？お前の罪を数えろ…」

「と、冬真？何を怒って」拘束『ハウリングバインド』（キイイイ
イン！！）「ひぐっ！？」

カードから波動が出て、紫に当たりその動きを止める。
特殊な波動で当たった相手を短時間麻痺させるスペルだ。

「天光満つる所我は在り…黄泉の門開く所汝在り…」

「な、なにい！？それは！…じゃなくて御免なさい許してええ〜！

！〜」

「出でよ、神の雷！『インディグネーション』」

ズガアアアアン！！！！

ピチューン…。

やり過ぎとはこれっぽっちも思っていない。

あと技や術がテイルズ寄りなのは、俺があまりそういう歴史上の偉人を知らないからだ。

結局はアニメや漫画のキャラから教えるのが上手そうなキャラを選んで、スキマを通って説得し教えてもらった。

流石に無理やりはしない。神隠しになっってしまうから。

…なぜかシャドウスキルのエレ・ラグが出てきたときには正直焦った。

まあ一緒に酒飲んだら、仲良くなってしばらくクルダ流交殺法教えてもらったけど。ノリノリで。

こっち来て初めて死ぬかと真面目に思った。

…多分あの時肉体能力EXを大きく超えたな。

…それにしても昨日妖忌殿に放った『魔神剣・双牙』がまさか『霊衝波・2連』という同系統の技に防がれたのは内心驚いた。

でもテイルズの連中は初期から魔神剣覚えているし…もしかして結構簡単？

ちなみに俺は習得速度もチートらしく、すぐ覚えたから、よくわからん。

…脱線しすぎたな。

「ちよつとそこの盟友。待ちなよ、ここから先は人間の入る所じゃないよ？」

そんな俺に話しかけるのがいた。

…池から出てきたとりあえず全体的に青い少女だ。

妖怪の山は基本的に閉鎖的、排他的で無遠慮に入ったりすると痛い目を見るらしい。多分心配してくれたのだろう。

ここには紫を通して許可を取ってあるから大丈夫なのだが…どうやら知らないのか？

「一応、八雲 紫を通して許可は取ってあるんだが？」

「…あんた、親切で言っているんだ。天狗を怒らせないうちに帰った方がいい。それに、あんたは強そうに見えない」

失礼な。これでも何百年も修行して、クルダ流もテイルズも習得したんだ。

…ちなみにこれ以上は習っていないのではなく習わないのだ。無意味に手を増やしても混乱するだけだし、すでに多すぎる。

近・中距離はクルダ、テイルズ。遠距離はテイルズ、弾幕で事足りる。色々開発もしているし。

…今日は脱線が多い気がする、疲れているのか？

「…そういえば名前をまだ言っていないかったな。白堂 冬真だ。これでも一応、紫より強いんだが？」

「あたしは河城 にとり…河童」

そういうとにとりは背負っている翠のリュックを広げ

「あややく何かと来てみれば『賢者の懐刀』白堂 冬真さんではないですか？」

いきなり現れた黒い羽根の少女の言葉に動きを止めた。

「…マジ？あの『暫定規格外』？」

「…さっきからなんだその二つ名は」

どうせ紫なんだろうさ。今度は何をぶつけてやるつか。

「へえ〜冬真がねえ〜。よく言うけど、人間見た目がすべてじゃないんだねえ〜」

「あやや！取材いいですか！今が旬の貴方は幻想郷でいま最も注目されているですよ！」

…ちょっと待て。

「その…あ、射命丸です。射命丸 文。鴉天狗で文文。新聞の記者です」…文か。文が言っていた『注目されている』ってなんだ？」

そういうと文は「あや！？知らないのですか！？」と大仰に驚いた。ていうか知るわけが無いだろうが。

「数百年前から八雲 紫が各地で大方が惚気気味の自慢話をし出しましたね、なんでも拾った子供を育てていたらしいのですが、その話の殆どがなんと規格外の事か！」

「…たとえばどんな？（…のろけてなんだ？）」

「魔法使いでもないのに「捨虫」の魔法も使わずに完璧に不老不死になったとか、一度見た八雲 紫のスキマを完璧かつアレンジまで加えて自分のものにしてしまったとか女性ですら羨むような美貌だとか」

パシヤツ！パシヤツ！

「…撮るな。他には？」

「ここ最近見られるようになった八雲 紫との訓練やお仕置きの圧倒的な強さ、その精霊剣なるものの強大さに、それを扱える精神と技量！そして！！」

グイツと顔を近づけてくる二人。てかなんでにとりまで興奮気味なんだよ。

「そして？なんだ？」

とりあえず話を進めよう。

「八雲 紫と死神からの求愛行動です！！それに噂ですがたびたび閻魔が貴方の様子を浄瑠璃の鏡を通して見つめながら悩ましげにため息をついているとか！」

…おいおい。殆ど全部じゃないか。てか後半は、おかしくないか？

「そしてこれが新聞です！！お近づきの印にどうぞ」

そう言われて紙束を渡された。

…ていうかここ活版印刷あるんかい。

しかも目線でさっさと読めと促してきている。
仕方ない読むか。

|||||

文文。新聞

噂の人間特集！

近頃八雲 紫が自慢されている人間ですがついにその存在を発見することが出来ました！

昨夜に森で発見した時は符術？らしきもので紫様の動きを封印し、聞いたこともない魔法で巨大な雷を八雲 紫に落として圧倒的な勝利を得ていました。（それでも魔法使いではないらしい）

後日八雲 紫様曰く、冬真（人間の名前か？）を怒らせてしまい、逃げようにも力量差があり過ぎて無理でお仕置きを受けた、だそうだ。

あの八雲 紫に圧倒的と言わしめた人間の名前は白堂 冬真。

彼の秘密を探るべく私は張り込みを開始。
驚愕の事実を見てしまいました。

なんと！

八雲 紫が彼に求愛行動（なかば強制的に）をおこなっていたので
す。さすがの私もあれには興ふ（自主規制）

しかもその姿の美しいこと！嫌がりながらも湧き上がる快感に我ま
（自主規制）

八雲 紫。まさかの光源氏！？

さらに死神からも接吻！？

閻魔の独り言「妖怪や神は夫婦制？それとも一夫多妻制？白黒はっ
きり……う~~~~~！」

記者の読みだと彼女も狙っているのでは？

さらに先日魂魄妖忌にも認められ娘を頼まれたとか。

全てにおいて信じられない規格外の人間だがまだまだ話の種には困
らなそうである。

記者はこれからも彼を追いかけたいと思う。

|||||

「…文」

「あや？なんですk」「拘束『ハウリングバインド』（キイイイイン
！！）」「あややあう！？」

殺気を解放する。

「なんかこの頃誰かいるとは思ってたが…そういうことだったか」

「あ、あや？もしかして…お仕置きですか？」

ガクガクブルブル…

笑顔だが小刻みに震え凄じ量の脂汗を流す文。

にとりは池の中に退避して涙目でこちらを見ている。

「小さき子よ、滅びの本懐を遂げるか…」

「あや？体が動きませんか？逃げられませんかね？」

「天界の審判、此処に呼び醒まさん」

「あ、あの…許してくれたり…しませんよね…？」

「ゴッドブレス」

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！！

文の上に光る巨大な手が迫る。

「すっ！すいません！御免なさい！！イヤアアアアアア！！！！！！」

「おおっ！盟友凄いな！？…怖いけど」

ズウウウウウウウン！！！！！！

「あややややあ~~~~~！！！！！！」

ピチューン！

「悪は滅びた」

「いや！やり過ぎだろ！？」

とりあえずまた無駄な時間食ってしまったな。
早く天魔に会いに行かないと…。

文？白い犬耳付けた女の子が「先輩の自業自得です、ご迷惑おかけしました」とか言って担いでいる。

「じゃあまた今度ゆっくり話そうよ冬真」

「ああ、じゃあまたな？にとり」

俺は山を登って行った。

犬子？と。

第09話 会談モドキ〜これだから実力主義は…〜（前書き）

上手く書けない。

けど頑張るもん！

冬「よし銃符『ハツピートリガーマイウェイ』」

ガガガガガッ！！！

ぎゃあああああああ！！！！！！

作「とうとう地の文まで 攻撃したよ」

冬「！？お前じゃない…だと？」

第09話 会談モドキ〜これだから実力主義は…〜

あの後ボロボロの文を迎えに来たのは犬走 椀いぬはしりという狼天狗もみじだった。

「ほう？天狗って狼のもいるんだな？」

「あ、はい…。私達狼天狗は警備などが主な仕事でして」

なるほど、確かに警備を狼に任せるのはピッタリだな。

「そして鴉天狗は報道関係を仕事にしているんです」

「ああ、だから新聞の取材をしていたのか」

…迷惑極まりないが。

「…：本当にすいません。先輩は嘘は書かないんですけど、面白おかしく書こうとしてよく迷惑をかけるんです」

そういえば妖夢が会ったら気を付けてください、と言っていたような気がするな。

そして目をつけられたら諦めるか、無視するか…：何度も追い払うか、痛めつけるか。

…：なんか想像したらいらついたので、色々試すことにしよう。痛み付きで。

その頃の椀。

(う、噂通りで綺麗だなあ)。クールなのもカッコいいし…。(とじいっと見つめながら思っていたりする。)

隣で顔を紅くして尻尾をフリフリしているけど、椛：なんかいいことあったのか？

そうして二人（とまだ気絶している文）は妖怪の山を登る。

椛に言ったところ、一度どこかに言ってから戻ってきて「許可を取ってきました。天魔様のところへ案内いたします」（キリッ！）
と言ってくれたのだ。

なんて頼りになるのだろう。

実は「ファンなんです！お願いします！私にデ…案内の任務を下さい！」「！？わ、わかった！いくがよい！？（気迫が上級天狗並みだと！？）」

とかいう上司とのやり取りがあったとか無いとか…。

ちなみに文が写真をばら撒いていたりするので、妖怪の山では結構有名だったりする。あとシヨクホモ女性達限定で。

これでまたお仕置きされることにもなるが別の話。

「ほう、貴殿があの人間か…」

「白堂 冬真だ。あなたが天魔…だな。」

そういつて2人でフツと息を漏らし笑う。

(目を覚ましたら…なんですかこれ？冬真さんよくこの気迫に耐えられますね)

とても耐えられない気迫に充てられているはずなのに何気に余裕の鴉天狗と、

(はああああ…さすが冬真さん…)

もうなんかキヤラ崩壊どころじゃない犬子がいた。

「そういうことで、博霊大結界に賛成して欲しいそうだが？俺もぜひそうして欲しいのだが」

前に紫に聞かされた計画を自分なりに解釈して伝えると、天魔はフム…と顎に手を当て大きく何度が頷いた。

紫からは何度か聞いてはいるものの別の視点からの意見を聞いてみたかったらしい。

「どのようにして結界を創る？」

それも以前紫に相談されたな…ええと確か

「紫の能力で『常識と非常識の境界』を操ることで中に住む妖怪の力を低下させないようにし、博霊の巫女の『博霊大結界』でそれを空間に半永久固定、最後に俺の能力で『結界全体の定義』を操作して、外で弱った人外なんかを呼び寄せたり、調整したりするんだそうだ」

「…して、鬼の衆はなんと？そうになると必然的に住む地域が限定されてしまうが？」

「まあそちらのほうは…紫が既に話をつけたらしいのだが、以前に地底に開いた空間を俺が固定し、鬼を中心とした地底でも暮らして

いける妖怪に住んでもらうつもりらしい」「
まあその代わり色々と便宜を図ることになったらしい。
紫のせいで俺が。

…移動した後にでも挨拶しに行かないとな。

話はこれで終わりだとお茶菓子の羊羹を嚙下し、お茶を啜ってから
帰ろうとすると天魔から待ったが掛かった。

「それはそうと冬真殿は相当腕が立つそうだが…」

…嫌な予感がするな。

「手合わせを願えるか？貴殿なら本気を出せそうな気がする」

「…はあ。まあいいが」

どうせだからアレ…試すか。

広場に出る。

そこは昔から決闘や鍛錬に使われていたらしい。

しかも今回は大天狗達の手により強大な結界が張られることとなっ
た。

それだけ天魔が、そして天魔に本気宣言をされた冬真が強いという

事でもある。

試合形式は弾幕ではない。というかまだ知られていないだろう（知っているとしたら鴉天狗の文くらいだろう）

という事はさつきも明言した通り、人間（不老不死だが）VS天狗の長（＝天狗の最強）の本気勝負。

しかし冬真、余裕がある。なぜなら紫が「私と同じくらいか少し上かしら？」といていたので紫を相手に遊んでいると、どうなのよ？という感じなのだ（どういう感じだよ）

「アポルト『研究試作段階武装 101式』」
ジャキッ！ パシィッ！！

後ろのスキマから大剣が飛び出し、それを掴む。

使用頻度の高い武装はcode『アポルト』と唱えるだけで専用の武装が武装倉庫より呼び出せるようになってる。

取り出した大剣は刃渡り150cm。全長184cmで片手持ち（大剣で片手持ちとはこれいかに？）

しかしゴツイかと言われればそうでもない。柄と鐔は紅くシンプルかつ頑丈で、砲身も特殊な金属でできているかのように薄い口径20mmくらいの砲が120cmと肉厚かつスマートな刀身がスラリと合体している機械剣型の概念武装である。

斬りつけた時に『奪力』『無血』の付加概念を発動し、怪我をさせずに無力化させることを目的に作った。

（ちなみに試したところ弱い者は気絶、やや強くても腰が抜けてしばらく立てなくなった）

今回これを出したのは概念の使用無しでの威力を試すためだ。さすがに殺してしまうのでいまままで試せなかったのだ。

…それにいくら死なない妖精相手でもいじめているみたいでなんか

嫌だった。

(以前、紫に試そうとしたら涙声でやめてくれと嘆願され、少し申しわけなくなつた)

「…これはまた重心の悪そうな剣だな」

「持てるのだからいちいち両手で持つ必要無いだろ？とりあえず『
装填』^{リロード}」

魔力砲撃用の薬きょうに魔力を込める。

ガシユン！×10

みねについた圧縮チエンバーに入っている空薬莖に魔力が込められて封をされ、装填される。

これは、撃つとゴミが出るのなら元々空の薬きょうを込めておけばいいじゃないかという考えである。

打ち終わったら、放熱板よろしくみねのカバーが開くのでまた込めれば勝手に装填される訳だ。

さらに残弾カウンターも標準装備である。

((((いや、それ片手で持てるのぉかしい))))

(鬼なら余裕でしょうけどねぇ…メモメモ)

(さすが冬真さん…)

外野でモブ天狗しかまともなことを考えていないし。

「それでは…始め!!」

審判の天狗が扇を振り下ろす。

「かああああ!!」

バシユウウウ!!!!!!

「ちい！いきなりか！シヨット！」
ガツンツ！！ガツンツ！！
天魔が開始早々口から光線を吐いてくる。

それに向かつて『魔力射撃』を2発撃ちこむが威力が減退せず、横に避けると天魔の砲撃は結界に当たって霧散した。

（あれほどの砲撃でも防ぐか、この結界は）
結界は博霊の特権だと聞いていたが、人数使えばできるか。

「ならこれで！！バースト！！」

内心天狗の結界に感心しながら砲撃の反動でまだ動けない天魔に向け『魔力射撃』を打ちこむ。

キイン！！ズガガガツ！！！！

「ぬう！！やはりやりおる！！」

3発使用のバーストが胸に直撃したにもかかわらず、天魔は仰け反るだけだった。

堅い。紫の結界とかじゃなく物理的に堅い。
流星はでかい図体しているだけはある。

（だがこの剣にとって砲撃はあくまで牽制本命は…）

「『点火！！』」

ガシュウ！！ブウウン！！！！

魔力刃が刀身に覆われていく。

まだ仰け反っている天魔に接近し頭まで飛び上がり…。

（正面突破！！！！）

「せあああ！！！！」

片手で唐竹割りを仕掛ける！

「ぬうう！！！！」

しかし両腕でそれは防がれた。

(だが想定内！)

『刃拳ハイケン!!!』

ザシユウ!!!

「ぬあつ！」

さすがに素手で斬撃を放たれるとは思わなかった。ただろう。天魔はクルダに反応できなかったらしく、剣を持っていない方の腕を振り丸見えの顔面に真空波が直撃した。

『重爪チェンソウ!!!』

追撃とばかりにこれまたガラ空きの胴体に両足で対獣魔用の『重爪』を放つ！

ヒュヒュンッ！

「二度は喰らわぬ！」

剣を受け流し後ろに飛び下がることで天魔が『重爪チェンソウ』を避け、

「ふぬあつ！」

剣を振り下ろした冬真の隙を狙い神速の突きを放つ！

「ちっ」

ガン!!!ズササッ!!!

それを剣の腹で受けるもあまりの力に踏ん張っても地面を削りながら後退する。

冬真がハッと顔を上げると天魔の口に霊力が集まっているのを感じ、大剣を地面に突き刺し強制停止をした。

あれは最高出力とみて間違いではないだろう。そうなるとこちらも流石に試作で相手をするのは分が悪い。

『転移。砲撃杭アルテミス!!!』

そしてそれを前に浮かし自身はテレフォンパンチのように構える。

「バスター!!!」

「カアアアッ!!!」

「ニードルッ!!!」

天魔の霊力のこもった砲撃の中心にパンチをするようにアルテミス

を叩き打ちこむと、それは銃で撃発されたかのように紅い砲撃に包まれながら発射された。

キイイイン！！！！

そしてそれは、

パン！！！！！！

「何！あり得ん！！」

何倍にも太い天魔の砲撃を消滅、貫きながら天魔に直撃し、爆発した。

ズガアアアアア！！！！

「…ん？成程、俺の勝ちか」

「…ああ負けたわ」

煙が張れるとそこにはぶっ倒れて動けなくなった天魔が頑張って手を振っていた。

(ふうむ…冬真さんはとくに人間を辞めていましたねえ)

(人間が筋肉だけで真空波を発するなんて…さすが冬真さん！)

(…椀？貴女さつきからそれしか言っていないませんか？)

部下が壊れ始めたことにやっと気付き始めた天狗が傍らにいた。

『バスターニードル』^{アルテミス}…あらかじめ霊力(魔力でも可)を込めた神秘の定義を追加した砲撃杭を魔力(霊力)砲に乗せて打ち出す。大型のレールガン。

因果逆転とまではいかないが、砲撃自体にカウンターが定義されている魔砲。

本当は貫いていって最後に爆発するが、やっぱり天魔は堅かった所為か耐久値を超え爆発、衝撃を与えることしかできなかった(まあその衝撃で動けないぐらいの威力があるのだが)。

バチバチ!!

「…ん?…あゝ」

地面に無理やり刺した試作大剣から火花が上がる。

「…やはり耐久力に難ありか…しかし完成は近いな」

天魔の突きを喰らったおかげでフレームが曲がり、魔力刃回路の中の機動回路もショートしてしまった。

「…オリハルコンに形状記憶と衝撃吸収を組みこんでみるか」

ちなみにこの大剣。

正式名称：概念武装・機械砲剣『ドュリユンダルト』は後日めでたく完成し、冬真の主武装となったとさ。

砲撃も威力不足をなんとかしたり、上位砲撃に状況に合わせたバリエーションを創ったそうだ。

第10話 その頃の姉さん（前書き）

ブラコン姉さん参戦の前フリです。

私の作品は大体姉弟で主人公サイドは固定されます。

…理由ですか？

仕様です（キリリッ）

第10話 その頃の姉さん

（生前世界）

冬真が転生してから2年後。

ザッ…ザッ…ザッ…。

「…確かこの辺りか？」

冬真が災厄に殺された場所に一人の女性がたどり着いた。

漆黒の長髪に少し青みがかった黒の瞳の彼女は、

白ダイヤの髪止めと、黒ダイヤの髪留めをこめかみと目元にそろえて差し、

ピンクのタートルネックセーターに二重の銀鎖のベルト、

ハイカットジーンズにロングブーツという出で立ちでそこにいた。

だが荷物というものは小型のショルダーバックのみで、

あとはひたすらに目を引く銀色の角ばった腕輪が左手についているだけである。

誰がどう見てもハイキングやキャンプをしに来たようには見えないし、今流行っている噂を知っている者ならば絶対に来ようとは思わないだろう。

パラパラ…。

「フム…」

しばらくして彼女は胸のポケットから手帳を取り出し内容といましがた見つけたモノを照らし合わせ始めた。

彼女の名前は 高音^{たかね} 百合姫^{むつひめ}。

死んだ青年光輝の実の姉で、光輝は知らないがエクソシストと陰陽師のようなことをして生計を立てている女性だ。

彼女は運以外すべて冬真から奪ったといえるほどの天才、かつ驚異的な身体能力も備える完璧超人。

大学では、追隨を許さぬ知能、発想を持って彼女の理論は容易く何世代も後にたどり着くが、これはまだ世に出すには早いと封印、他にもいくつかの学科でそのようなことをしていたらしい。

姉の優秀さゆえに幼いころから光輝はいじめに会う事も多く、本人は嫌がっていたが無理やりにも彼女が守ってやるが多かったほど、自他共に認めるブラコンである。

まあ運が死ぬほど無かったので、様々な相談を冬真に頼んだりしていたが。

そんな彼女が弟の死に反応しない筈が無かった。

『男性、キャンプ中に猛獣に襲われ、死亡』

彼女は嘆き悲しみ、一時期は後を追う事さえも考えたという。

しかしある日彼女は違和感を覚えたのだ。

警察の遺族（私たち）に対する反応、病院の医師の反応両方に。

…情報規制か？

直感と職業による異常察知が彼女を調査に駆り立てた。

警察に発見し検死のカルテを盗み見ることから始めて一年。

「まず警察の検死の結果がおかしい。動物の爪痕、毛、唾液などがついていない」

「そのかわりに検出された液体は…判別不可能？よって変死扱いか…社会の混乱を防ぐためか？」

「自衛に使っていたらしき刃物についていた肉片は…99.89%人間に近いが別物？」

「レイジエ…どうだ？」

「ふうん…逆位置のつるされた男に、死神、塔、戦車、さらに逆位置の運命の輪」

「…で？」

「やはり上位存在、しかもかなりの力を持つ者に殺されたな…最初から狙われて」

「…そうか、これは報酬だ」

「やはりだ…光輝は化物の類に殺された可能性が高い。…仇は討つぞ光輝」

そして準備を整えてついにこの時がやってきた。

立ち入り禁止の柵を越えて、何故か消えた荷物（そんな時に泥棒か？）の残りである唯一の十字架のシルバーネックレスが落ちていたといわれている場所までやってきた。

キャンプ痕の周りに符を張り結界を展開する。

あとは私を餌に奴が来るのを待つだけ。

(ドクンドクンドクン！)

心臓が速く鳴る。

緊張と興奮の両方が高まり、アドレナリンが過剰分泌され始める。

やっと、やっとだ… やっと愛しい弟の仇が討てるのだ。

レイジエは危険だと言ったが関係無い。何でもいい、早く出てこい殺してやる！

殺して殺してコロしてコロしてコロシテ！！

(っ！？落ち着け…私)

殺したくて興奮するなんて初めてで、やはりそれだけ冬真が好きなんだなあと思った。

だが、私の戦闘スタイルは冷静で無くてはならない。

冷静に物事を捕らえ、状況を判断、それに応じるには熱くなつてはいけない。

よく言うだろう。思考はCOOLに心はHOTに、だ。

仕事用のメモ帳を開く。

なにか見落としていないか？なにか役立つ情報がまだないか？

私たちみたいな人外を相手にする場合はいくらあつても情報が足りないことの方が多い。

そのため一流の人間になると様々な特化技術を戦術に組み込む者が多くなる。

例えば吸血鬼用に波紋を習うとか、不死者に対しては概念武装とか、霊格が高い者には式典魔術とか。

まれに一般社会にまで有名に成程情報がありふれた者もいるが、そいつらの場合は、強すぎて情報があつても並みの術者では束になつても敵わないからである。

例をあげるならば、クリスタルレイクの殺人鬼。映画なんかにもなっているが、奴は昔から人海戦術で駆逐されてきたがそのたびに被害も大きく、

何度も復活した。ちなみに華奈が19の時に単独による抹殺、コアの消滅に成功した。

今も、死んだと認識されている有名な化物は、復活しては待ち伏せしていた地元の術者団が総意を奮って防いだりしているのが現状である。

ちなみに給料は大体国家予算から出ている。(華奈は消滅成功時、ひそかに当国首相のポケットマネーで御礼をもらったとか)

華奈はメモに一通り目を通し、自分が落ち着いたのを確認、ふうと息をついた。

それと同時に頭に一瞬なにかが走る。符が奴を感じ取った様だ。

(…来る)

後ろを振り向く。

「…光輝、お前は…」

それと同時に体に押しかかる重圧。ブワツと拭き出る嫌な汗。

「よくこんな相手に…一太刀入れられたな…」

見た目が醜悪なのはよくあること、それよりも必死に警報を体内に鳴らしている原因があった。

「…お姉ちゃんは自慢に思うぞ、ホントに」

纏っている力…魔力、霊力なんか比ではない密度、生命力、神秘性をもったその力。

「…使徒…それも墮天種…だ…と？」

使徒…人間の歴史上数度、現われた正体不明の者全体を差し、大体が空から飛来、例外なくその背中に翼を持つ。特徴はその身体に纏った神気。絶対領域『天殻』(魂の格の差による干渉不可概念の障壁)により、

殆どの攻撃が通らず、使徒には使徒の攻撃しか満足に通らないとさえいわれている。

対策は、大勢の神官による仮想使徒召喚儀式により一時的に受肉し

た使徒に戦闘能力が高い術者がトランスし、戦闘を行う事。
または絶対領域を中和するための儀式をあらかじめ仕込んでおき（最低でも10年は必要だが）絶対領域を無効化した時に一斉攻撃で殲滅することである。

しかし、再生能力持ちがほとんどで、後者の方法で殲滅したことは殆どと言っていいほど無い。

そして使徒の体液は赤であるが、墮天種は…黒。そして翼も黒。枚数も今まで見たことのない6対持ち。

その肉塊の表面に張り巡る血管には漆黒の液体がくつきりと写り、翼からは禍々しい圧力が発せられていた。

（レイジエが言っていたな）

華奈は震える体に喝を入れ、構える。

『もし…もしもだ。使徒の墮天種がいたらだ。諦めろ、たとえ2対持ちでも人間一人に敵うもんじゃない』

（諦めてたまるものか）

「私は…負けない。」

華奈は丹田から声を振り絞るように自らを鼓舞し始めた。

彼女の主力魔術の一つ。暗示魔術による強化。

彼女はそれを何度も口頭で、心の中で、無意識下で何度も繰り返し詠唱することで『私の勝利』という概念を創らんがごとく、身体能力、感覚、魂の格を強化した。

「来い、『神楽』」

左手を前にかざすと腕輪から粒子が出現、集まり出し一瞬でその手に機械じみたナギナタの様なものが握られた。

腕輪については彼女の頭脳による結晶である『粒子の再構築』と『

空間圧縮』、さらには『次元のはざまについて』の理論を、

「せっかく発見したんだし私くらい楽しんでもいいだろ」という考えの下製作した物で、無制限に近い収納スペースを持つ。

簡単に説明すると『粒子化』 『次元ワープで収納用小次元へ』

『再構築』。

ちなみに究極ジュラルミン製らしい。

そして取り出した得物は『可変蛇腹刀【青龍偃月刀・天香山】』あまのかぐやま

機械じみた青銀のフォルムを持つその大刀は三形態（青龍偃月刀・

大剣・蛇腹剣）への変更が可能であり、

主にその蛇腹模様の入った長い柄を作動することによりギミックを作動させる。

「マジックマテリアル、
魔術媒体、 『聖水・禁断の果汁』」

さらに腕輪より現存する最高の聖水をあいている右手のひらに転移。

「まずはその天殻を中和する！」

そしてそのまま聖水のピンを握り魔力を込める。

「聖なる水よ！その力をもって近き性質を持つ領域を中和せよ！」

いくら最高のものと言ってもただ振りかけるだけでは所詮は人間の作りし物、効果がある訳が無い。

しかし彼女には誰も持たない固有魔術があつた。

「概念魔術」

それは一般常識から秘匿概念まで、物に宿る概念を媒体を使い捨てる代わりに純粋な概念攻撃をほぼ際限なく増幅して打ち込むことが出来る魔術だ。

（まあ増幅しすぎると当たり前のように魔力を食うので何発も撃ちたいなら2〜5倍にしておくべきだろう。それでも一介の魔術師からみればチートだが）

「チャージ…チャージ…チャージ…!!」
今回は相手が悪すぎるうえ時間が延びると負けしか見えないので4
0倍くらいまで粘って増幅を続ける。

手の中で聖水のビンが純粹な概念として構成が解け、いまだ溜めら
れている魔力と混じり、その魔力を概念に書き換え始めた。

グジュルグジュ…!!

(?!?人型になっただと!?)

符の結界を前にして様子見かと思っていた矢先、紫色と黒の外殻を
2m程の人型に形成し、背中からは無数の触手がうごめいている形
となった。

一見、近未来のパワードスーツのようにも見えるそれは符の結界に
両手を当てたかと思うとすぐさま振り抜き

バリバリバリ…!!

紙のように結界を引き裂いた。

(だが間に合った)

「チャージアウト!フィールド…ブレイク…!」

縮地により使徒の領域が展開される前に接近、胸についている黒い
核に右手の概念を叩きつけた。

パキイン…!!

その瞬間、展開と同時に百合姫を分割しようとした領域が砕けた。
使徒がよろけるのを見ると同時に咄嗟に右手に小さな火種が転移し
てくる。

『聖人の火』だ。聖人認定された人を埋葬する時に使った火には神
性が宿るらしく、それを消えないように保管している教会もあるの
だとか。

これは誰だか忘れてたらしいが百合姫の目に留まり、百合姫製の人工
火種に移させてもらったものだ。

「聖人の形見なる火よ！その神性を持つてかの敵を焼き尽くせ！！」
今回は通常の増幅だけなので5倍だ。元々の攻撃力も十分な上、領域が無い核に直接ぶつけるのだし、幾らよろけていても隙があれば死ぬのはこちらだ。

「！？邪魔だ！！！」

左の神楽で自動防御なのか、攻撃してきた触手を纏めて切り捨てる。

「チャーシアウト！！セイクリッドフレーム！！！」

「ギョオオオオオオオオ！！！！！」

その瞬間ポウン！！と一瞬にして凝縮された聖火が核を包み、さらに全体を燃やし始める。

「まだだ！神核：解放！」

止めを刺さんと大技を出すのに一旦距離をとり石突を左に捻る。

するとキイイーン！！という音とともに刃に嵌まっていた球体が水晶の如く青く透きとおり刃と同時に光り出した。

「認証開始！！！」

認証完了… 拝命付与

若い女性の声… 天香山あまのかくやまが百合姫に応答する。

そして横薙ぎの体制のまま地面を蹴る。

「光輝の！仇！！！」

拝命完了。そのまま出力補助に切り替えます

それをさせんと

燃えているのに関わらず触手を伸ばしてくるが、気にも留めずにすべて切払う。

一時的に天殻を纏った刃に対していくら墮天使徒といえ天殻を纏っていないければ邪魔にもならない。

「拝命！執行！！殺神剣！！ジャツジメントセイバー！！！」

そして再接近、最大出力の神楽を全力で振り抜いた。

ガガガガガッ！！！！

「！？何っそんな馬鹿な……」

しかし、先ほど中和した威力を上回るそれは、再生した天殻によりとめられた。

（ちっ！学習と強化がこんなにも早いだなんて！！）

もう持ち札に有効な手は無く、しかも一撃で倒すのなんて無理になっってしまった。

「くそっ！迂闊だったか…一時撤退しかないか」

うしろを向かないように距離を開けながら腕輪の転移装置を始動する。

開始まで1分。それまでは時間を稼がなければいけない。

腰から対人外概念を付与してもらった拳銃『魔改造マシンイグル50AE』を取り出し右手に持つ。

さらに神楽の柄を右にねじって押し込み、蛇腹剣に変更した。

大量の触手が逃がさないとはかりに襲いかかってきた。

「外してたまるかあ！」

ガガガガガガン！！！！

ギヤリリリリリリッ！！！！！！

大口径の拳銃を連射し、左手で蛇腹剣を縦横無尽に振り回す。

さすがに本体の動きはまだ鈍いらしく、のびすぎた触手には天殻が殆どないので軽い付加のかかった両方の武器でどんどん削っていく。

この銃は弾倉に転移機能が付いているので、下向き矢印の特徴的な弾倉は15発以上は弾丸倉庫から直接転移、随時装填されるので殆ど無制限だ。

だがそれでも触手の数は増えていきとつとつ囲まれてしまった。

「はあっはあっ！？くっしまっ！？」

転送5秒前、ついに両手を捕まえられてしまっ。

そしてそのまま身体をねじり心臓は外すも、十分な致命傷を受けてしまった。

「がぁあっ！！！！」

というか腹に風穴が開いてしまった。

『転移開始：エラー発生。ランダム転移になります』

薄れゆく意識の中百合姫は最後にそう聞いた気がした。

第10話 その頃の姉さん（後書き）

ちなみに姉さん真面目なんでオタクじゃないです。でも考えることが天然でアニメネタだったりするのはしょうがない。そういう世界で生まれたんだもの。

第11話 姉弟再開〜その姉、スーパーロボットを超える存在也〜（前書き）

職業柄、震災復興しているので中々更新できず、すいません。

他の同業者どうしてるのだろう。

続きを思いついても仕事が多いから忘れることが多いし。

* 今回の百合姫さんは喜びで人格崩壊しております。

復活まで2話位お待ちください。

第11話 姉弟再開〜その姉、スーパーロボットを超える存在也〜

俺はそのまま妖怪の山を飛んで下山し、永遠亭に向かった。

その時、天魔に記念にとお土産をくれたり、椀が離れてくれなかったりした。

…なんかいい匂いでもしたのかな俺。

「ついたぞ。ここが永遠亭だ」

そんなことを考えていたらいつのまにかついていた。

じつはさきほど竹林を低空飛行していたのだが全くたどり着けず、休んでいた。

そうしたら声をかけてくれたのが俺と同じ髪と瞳の色を持ったもんペを着た少女、藤原妹紅だ。

彼女はこの竹林、『迷いの竹林』の案内人をやっているらしく、唯一の病院でもある永遠亭に行こうとする人間の患者とかを面倒見ているそうだ。

「それにしても幾ら知らないとは言っても、わざわざ低空飛行する奴初めてみたぞ」

そう言っただけ振り返った彼女はまた最初みたいな呆れた目でこっちを見た。

「あゝいや、立派な竹だなと思ってな…それだけだ」

「ふ〜ん、まあいいや。次からは空飛んでいけば迷わないと思うよ？じゃあな」

そういつて元の道を帰っていき…。

「あ、待て妹紅」

俺が思い出して止めるときよとんとこちらを向いた。

「俺、白堂冬真。不老不死の人間だ。あとこれ持って行ってくれ」
そういつておはぎが入った大きな包みを手渡した。

するとああ、と納得いったような顔をして

「お前が『境界お気に入り』の男の娘」か…。って悪い悪いなんかそんな噂があつたんだよ」

俺の表情が凍ったのが見えたのか妹紅は少し焦った。

…て言うかとうとうそう呼ばれたのか。

次はどうシバこうか。

「…でこれ何…っておはぎ？こんなに貰っちゃ悪いよ」

「いや、案内の御礼は勿論だけど…天魔から貰ったお土産のお裾分け、それに」

まだ同じのが3つはあるんだ。という苦笑いしながらも嬉しそうに「ありがとよ」と貰ってくれた。

…本当に多すぎるよ天魔。思わずお土産用の倉庫を創ってしまったほど。

「じゃあまたな冬真」

「ああ、ありがと妹紅」

…なんとインターホンを見つけた。
門の右側だ。

紫が「元月の民なんだけど…技術力が凄いのよ」

とは聞いていたが、なるほどこの時代にこれは凄い。

ピンポン。

…うんそのまんまだ。なんか懐かしさを感じるのは仕方ないと思う。

「それより会社名がN I T O R I…て」

多分あの河童の少女だろう、左手にスパナ持ちっぱなしだったし。

そういえば紫が「河童は発明するのが得意なの」とかいつてたしな。

…あらためて幻想郷凄いな。

なんか奥の方で「え」と誰かな…師匠、あの人が来ましたよ！」とか聞こえた。

「玄関カメラもあるのか？」

幻想郷凄いな。大切だから2回言ったぞ。

冬真SIDE OUT

百合姫SIDE IN

痛みで目が覚めると私は白い天井を見ながら仰向けに寝ていた。体はまだピクリとも動きそうにない。でも動かないと…。

「ぐっ!?!ごほっ!ごほっ!」

「ああ!?!まだ動いちゃいかんよ。傷ふさいでる途中なんじゃから、あ、わし神ですよろしく」

…無理やり頭を動かすと、私に包帯を巻いている爺さんがいた。

それより一面が白い世界。転移エラーとは聞いていたがここはどこなのだろ「またスルー!?!姉弟そろってスルー!?!」!?!?

「……!?!ちよつと今!?!ぐうう!?!」
このじじ「神です」……冬真の事を知っている!

「……わし涙が出ちゃう、だってスルーだも「冬真もここに来たのか?」……来たぞい」

良かった。生きてる。冬真が生きてる!!!!
視界が歪む。涙だ。こんなに泣いたのは冬真が自殺しようとしたのを止めた時以来だ。

「……悪い取り乱した」

「いや構わんよ。応急措置は終わったしちなみに持ち物は枕元じゃいつのまにか布団に寝かされていて、ちよつと頑張っ見てみるとあった。

ポーチと天香山、マシンイーグル、服。腕輪は嵌まったままだ。よく見るとたたまれてる私の服装に貫かれたあとは無かった。なるほど……神ね。

そのあと私は寝たまま、今まで冬真にあったことを説明された。

一人でキャンプしてたこと。

やはりまだ友人は少ないか、いや異性が近づかなくていいのだが。

奴に襲われた時、少しだが力が発現したこと。

なるほど、才能という才能をすべて封印されていたのが、命の危機に覚醒したか。

結局死んだがその後ここに来たこと。

奴に殺された結果魂から輪廻の輪プログラムが破壊されていたこと。奴を倒さないと修復が不可能なこと。

身体が死んでしまったので新たな体を与えたこと。

「…おい！？あいつの因子は!？」

「ああ、大丈夫じゃ。自覚はしていないがちゃんとはいつとるよ」

「…良かった。あれは絆だからな」

「だが力が増幅しすぎて右目に封印しないとイケなかったのう」

力を与えたことしかも運よく？めでたく規格外。

しかもそれを決めるのがサイコロで…さすがは運だけは宇宙一。

今は男一割、女九割は伊達じゃない世界で暮らしていること。

なん…だと!!

言い寄られたりしているうちに襲われお手つきにされたこと。

その名も八雲 紫。

…………… 拝命執こ…お灸を添えよう。

そんな感じで説明は続いた。

神は私を冬真の世界に送ってくれと言った。

それにランダムだが力もくれるという、有り難い。

「何が出るかな！何が出るかな！」

…うんム力つく。

しかしそこはさすが私だ。

「「あ」「

結果は『そのままいけや』

流石運なし…あれまた心の汗が出そうだ。

その時だ。

「そうじゃ！なら饑別としてこれをお主の腕輪と合成して進ぜよう」といい、いかにも神々しい力を秘めた金の腕輪を取り出した。

…ちよつと待て

「何故ドラウプニルがある!?!」

「だってわし神じゃし」

私が驚いたのはほかでもない。

あるはずの無いものが出てきたからだ。

黄金の腕輪『ドラウプニル』。

それは神々の中で最高と称された美を持つ光の神バルドルがオーデインより授かりし愛用品である。

しかし彼はヤドリギの枝に貫かれて死に、その後ヘルヘイムからヘルモーズの手により持ちだされ、

バルドルの父オーディンに息子の形見として渡されたものである。

意味はドラウ（滴る）プニル（滴）。

いくらでも無限に金を生み出せたというらしい。（1説には8日毎に9個とかその逆とか同じ腕輪をうみだしたらしい）

最高の魔術触媒である（彼女はあまり必要以上に金に興味が無い）

そのままや弾丸として打ち出しても文句なしだ。

結果

黄金の手甲『ドラウプニル』完成。

今まで通り物の保管、転移が可能。さらに射出も可。

しかしその構造が『科学』『奇跡』に変わったため、壊れて使えなくなるが無い。

（これにはさすがの彼女も「私の科学の結晶が」といいつつ喜んだ。今までのデメリットだからだ）

追加要素

打撃力UP

対人外（使徒含む）に対する特効。

虚数空間への干渉。（何故これがついたか不明）

黄金の無限生成。

素材

神の黄金…やたらと頑丈で神力を帯びていて、さらに吸収、還元もする。オリハルコンと100%黄金を1:1で精製出来る。

元々ジュラルミンと合成したので、とても軽い。

「…もらっていいのかこれ？」

「よいよい。それじゃ送るが…しばらく動けんだらうから医者のもとに連絡して送ってやるわい」

寝ておれ、目を覚ましたらついておるから。

と言われたので私はお言葉に甘えていまだにウランのように重い体から力を抜き、睡眠に入った。

それにしても神と連絡が取れる医者、ねえ…アスケレピオスか？

「あ、もしもしもしもし〜わしじゃよわし、神様。痴呆じゃないぞい！？えーりん呼んで！えーりん」

【誰だよえーりんって……!???】

百合姫SIDE OUT

冬真SIDE IN

挨拶も程々に八意やじご 永琳えいりんさんにあって欲しい人がいると言われ上がらせてもらった。

「冬真くん…ですよね。なんか数週間前に自分の事を神だって言い張る痛い人から電話があってね」
間違いない、奴だ。

そう思いながら俺は隣にいる鈴仙・うどんげいん・因幡いしせん・いなばにさっきと同じおはぎの包みを渡した。

「あ、これ皆で食べて」

「あふ！こここれはどうも…って多っ！」

顔が赤くなったり、あたふたしたり面白い子だが永琳さんの弟子だそうだ。

なかなかの腕を持つそうだが、今見た限りではそうは見えないから不思議だ。

そうしているうちに、ひとつの離れに着き、ドアを開けて入った。

「…え」

「…あ」

「八雲の男の子の関係者だからっていきなり怪我人を送ってきたのよ。」

それで冬真くん、貴方彼女に見覚えは…」

力を扱う程度の能力』に目覚めちゃってさ、ほら私スパロボ好きじゃん」

そう、姉さんは科学の天才なのでスパロボをやるたびに「もっと金があれば造れるんだけどな」等と怖いことを言っていたのだ。スパロボは姉さんにとってネタ兼宝箱なのだ。つていうか能力がピンポイント過ぎないか？

「それで装甲もスーパーロボット並みなのか」
銃弾効かないんじゃないかなろうか。

聞いてみたところ、自分に危害が加わる威力以上の攻撃に対してだけ、装甲防御力が加算されるらしい。

…なるほど、触ってみるといつもの姉さんのほっぺだ。

「笑うな」

「ぴぎっ！」

とりあえず笑われたので霊力を纏ってゲンコした。

なるほど対物理障壁（アンチマテリアルシールドみたいなものか。普通に効いて、涙目で唸る姉さんを見ながらそう思った。

「つて冬真！霊力使えるのか！？ていうかお前能力は！？」

とりあえず早く元の姉さんに戻って欲しい。

「…『存在とその定義を操る程度の能力』「創造じゃん！？」はつきり言うな」

「光子力とかゲッター線使えるか！？」

「…多分」

「いよっし！？今度合体技やろうがっだっ！？」

「うん落ち着け」

螺旋力込めたらできちゃったじゃないか。
姉さんは悶絶している。

でも以外に面倒だったからもうやらない。
だっていちいち創造とかあほでしょ。

その後俺は気絶した姉を居間に転がし、改めて挨拶と結界に関する説明をおこなったあとおいとまさせてもらった。

勿論姉を肩に担いで飛んでだ。

ねえさんはまだ上手く飛べないらしい。

なんでも普通に飛ぶのさえ難しいのに、姉さんが飛ぶ場合ブースターやフライトユニットをイメージするので速すぎて練習がしにくいんだそうだ。

第12話 姉弟の真実（前書き）

今回の内容は過負荷なオリジナル要素を含んでおります。
納得できなくとも理解してください。

冬「んな無茶な」

第12話 姉弟の真実

次の日、起きたら姉さんが、紫に襲撃をかけていた。

「あああ！ととと冬真しゃま！早くあれを止めてください〜」
眠い目をこすっていると、涙目の少女（尻尾が九本）が胸に飛び込んできた。

…よほど怖かったのだろう。あゝよしよし。

「よくも！冬真の！貞操を〜！！！！！！光子カビーム！！」

「ふっ！防御結界！いくら姉でもそこまで関与する権利は無くてもよ〜」
「！」
ジュウウウウウウウウ！！！！！！

「今のは牽制！本命はこれだ！！ギガア！！ドリルウ！ブレイクウウウ！！！！！！」

バキヤアアン！！！！

「！？私の結界を破壊するなんて…なんて非常識なのかしら！」

「射程範囲から一瞬で回避するお前に言われたくは無い！」

…朝食作るか。

「藍朝食作るから手伝って」

「ええっ！放っておいていいのですか!?!」

本当いい子だな。俺が挨拶周りに言っている時に、怪我しているこの子を紫が拾って式にしたと聞いたが、本当あいつには勿体無い。

「いいんだよ。ああいうのは一度思いつきり喧嘩したほうが後腐れが無い」

俺は蘭の手を取って台所に向かった。

さすがにすぐに飽きて戻ってくるだろうと思ったのだ。
思ったのだけど。

俺は鉄の柱を存在作成し、定義の変更を行った。

「重力吸収100倍、対象 八雲 紫、高音 百合姫。定義変更」
そして二人の間にそれを投擲し、それは地面に突き立った。

「発動」

「のあああああああ!!!?????」

「きゃあああああああ!?!?!?!?!」

ビビタタ ン!!!

発動した瞬間、空を飛んでいた二人は鉄の柱に引き寄せられ磔になる。

「…俺が朝食だと声をかけてからどんだけ立った？」

「2時間です、御免なさい」

「駄目だ。お仕置き」

そう言っただけ俺はこの間完成したばかりの砲撃スペルを取り出した。
俺の理論で造り出した強化スペルカード。『強化詠唱スペル』

「自然に満ちたるマナ、生命の象徴たるオド、相反する二つよ」

これはマナ（魔力）とオド（気）の水と油の二つを数年前に発現した「捻じ曲げる程度の能力」

をフルに活用したもので、詠唱を加えることで威力を上げることが

出来る。

「お、おい冬真怒ってるぞ、どうすればいいんだ？」

「無駄よ。焼け石に水だけど、せめて最大出力で防御しときなさい」
そう悟った紫が64枚の結界を張った。

「マジかよ……」

その結界の数を見て百合姫もフィールドにディストーションフィールド、ATフィールドと、
思いつく限りの防御を施した。

「定義の壁を超えて集え、真実すら捻じ曲げ螺旋を描け、在ること
無いこと全て貫け」

どうやら姉さんたちは思いつく限りの防御を張ったらしい。

…無駄なことを。

「霊・魔符『エルゴフォーレプラストー』」

これは防御、障壁、領域全属性無視の広範囲砲撃だ。

キイイイイン！！！！…ズガアアアアアア！！！！

「ま、さすがに非殺傷だけどね」
気絶している二人は朝食抜き…と。

「藍、ご飯にしようか」

「は、はい〜（冬真さまって一番強いんだ!?!）」

昼間、紫がスキマで永琳さんを連れて来た。

「百合、これ貴方のもでしょ？忘れていったわよ」

そういつて永琳がとり出したのは、変な弾倉の付いた大型の自動拳銃。

「おお、サンキュ、私のマシンイーグルだ」

姉さんの危険物だった。

つていうかあれデザートイーグル50AE ゴールドフレームじゃないか。

「では真面目な話に移りましょうか」

永琳がそう切り出した。

「百合姫。貴女、純粹な人間じゃないわね。そして」

永琳がこつちを向いた。

「弟の貴方も」

…は？え？今なんて？

「あ〜〜！永琳ストップ。冬真はそれについて知らされていない」

「…どういふこと、姉さん。ならなんで今更…」

「待て、そう殺気立つな教えるから。」

「冬真。私たちは半妖、母さんが妖怪だ」

「母さんが…妖怪？」

「そうだ、そして永琳が本当に聞きたいのは、紫が勘づいているのはおそらく本当だ。」

母さんはとても長命でな遙か昔、幻想郷に住みついたことがあったらしい。

その時、妖怪の賢者や、月の頭脳の事を良く知っているかのように話していたよ」

「…そんな」

「母さんは希少種の『口裂け女』くちさき 朽崎 小夜子。さよこ 特性「言い伝え（都市伝説）が広まれば広まるほど強くなる」を持つ。事実上最強の妖怪」

そういえばあからさまなところがあったな。たとえばべっこう飴が好物だとか、

俺が中学校で友達にもらった貰った整髪料を見たたん半泣きで逃げ出したりとか（姉さんと父さんが「大丈夫！ポマードじゃないから」と訳のわからん慰めをしていた）。

…宝物が顔半分隠せるほどの大きさのポロポロのマスクだったりとか。

何故気付かなかった俺。

「やはり小夜ちゃんの子か…」

「凄い偶然もあったものね」

2人は思った通りの答えに納得の表情をしている。

姉さんの話は続く。

「だが母さんはここには馴染めなかった。母さん自体の力は強力だが優しすぎたんだ。それに母さんの夢はな…」

「『人間になりたかった』んだとさ」

口裂け女の言われは数多くあれど、母さんは元は人間で、その美貌を妬んだ当時の宮廷の女達に雇われた呪術師に妖怪にされてしまったそうだ。

「それでも母さんを理解してくれた人間は少なからずいたらしいがな」

それでも母さんの孤独を根本から癒してくれる、愛してくれる者はいなかった。

「そんな時に出会った男性が高音 誠志郎。当時天才と呼ばれていた外科医の父さんだ」

どんぐらい天才かっていうと、呪術的に妖怪になった母さんの裂けた口を外科手術（つまり物理的に力づく）で治し切ってしまうくらい。

母さんに惚れた父さんは、母さんの正体を知っても動じることはなく逆に、絶対に治すからもう逃げるな、俺の傍にいる。と告白した

らしい。

「力とか特性はそのままだけど見た目人間に戻れた母さんは父さんに求婚、力を受け継いだ私たちが生まれた訳だ」

「でも父さんの名前あんまり外で聞いたこと無いけど？」

「ああ、父さんヤブだ」

BJかよ。

永琳落ち込んでるぞ「私に治せなかったのに」って。

「でも小夜ちゃんはやっと『人間』なれたのね」

「…で、その天才と力を根こそぎ取って行ったのが姉さんで、俺には異常なほどの運が残ったと」

「そついうことだな」

あのあと今まで姉さんがどう暮らしていたとか全て聞いたが…まさか生前の世界ですらオカルトまみれだとは思わなかった。

しかもどうみても反則級の溜まり場である幻想郷で通用するレベルだとは…。

いや？この場合、姉さんより母さんが凄いのか。あの泣き虫母さんが。

あれで本当に街一つを一息に滅ぼせるってどんだけだよ。

「まあ、冬真がこつちに来た要因も全て聞いたし、災厄殺し手伝うよ」

「まあさっき聞いた黄金の手甲があるなら頼りになるけどさそれ何語？」

「カラミダート？スペイン語。災厄とかダサくないか？」

さすが、世界をまたにかける天才は違う。これからも頭脳面で助けてもらおう。

そしてさすが姉さん。天然で厨二臭い。本人にそんなつもりは全くないんだろうけど。

「話は終わったみたいね？じゃあ今度行く予定の幻想郷を隔離する結界についてなんだけど」

そのまま紫の話に移って行って、博霊とは当日に会う事になった。

「そういえば冬真、あらかじめ頭痛い老人に聞いてたけどさ、どうしても名前変えなきゃいけなかったのか？光輝でいいじゃないか」

「アカシックが駄目だって「何気安く根源使ってるの!？」」

「じゃあ…やっぱり私たち家族なんだしさ…」

姉さんが後ろからギュッと抱きついた。

「私が白堂 百合姫になってやろうじゃないか」

「…ありがと(ボソッ)」

第12話 姉弟の真実（後書き）

口裂け女が事実上最強の妖怪ってオリジナル設定どうよ？

俺は結構気に入っている。

冬「理論めちやくちやだけどな」

百合「その理論で行くと赤マントとか紫ババア、テケテケなんかのほかの都市伝説の連中もさらに凶悪になるな。」

紫「そして無害な人面犬やケセラランパセランは女神転生2次創作のピクシーの立場に収まりそうね」

藍「どうでもいいけど扱いが九尾以上の扱いなのがなにそれこわい、なんですが…」

永「ふっ、すべて作者にとっては伏線なのよ！！」

総員「な、なんだって〜！！！！」

作「どうだろね？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4099q/>

災厄に殺されし者～その者幻想に落ちる～

2011年10月8日15時45分発行